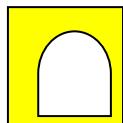


日吉台地下壕保存の会会報

第129号
日吉台地下壕保存の会

言葉の危機が時代の危機だ

会長 阿久沢 武史

新しい年を迎えました。今年も引き続き保存の会の活動にご理解とご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

昨年は安倍首相の真珠湾訪問で幕を閉じ、今年はアメリカのトランプ新大統領就任で幕を開けました。安倍首相によれば、真珠湾は「寛容の心」がもたらした「和解」の象徴であり、今回の訪問によって日米両国の間で「戦後」が完全に終わったことを示したいという意向があつたと言われています。しかし、現実には「戦後」はあいかわらず未解決の問題を抱えたまま、現代の日本人の心に幾つもの楔となって深く食い込んでいます。たとえば沖縄の基地問題の現状に対して、我々は深い憤りとやりきれなさを感じます。問題の本質は日米間という対外的なところにだけあるのではなく、むしろこの国の内側にあるようにも思えます。圧倒的な数の力を背景とした剥き出しの政治権力の姿、ごく普通の日本人の自国の歴史に対する無知、そこにあるのは「寛容」ではなく「不寛容」であり、内向きの思考はいまや全世界を覆う潮流になりつつあります。私たちはこれまでになく不安な年明けを迎えた正在といいのかもしれません。

保存の会としてできることは限られています。しかし、私たちの目の前には地下壕があります。常にそれを中心に据えて物事を考え、責任ある言葉で語りたいと思います。地下壕を知ろうとすればするほど、わからないことの多さに気づきます。壕内の物言わぬ闇の中に立ち、謙虚な気持ちで耳をすませ、もっと深く知りたいという思いを持つ時、「不寛容」や「無知」とは異なる道が拓かれます。今年もガイド養成講座が始まりました。これはベテランガイドが真剣に学ぶ場でもあります。昨年に引き続き今年も戦争体験や空襲体験、地下壕での勤務体験をもつ方々から少しでも多くの聞き取りをしたいと思います。そうして学んだことは、この会報だけでなく、定例の見学会や公開講演会、平和のための戦争展、港北図書館でのパネル展などを通して、会員の皆様と共有してまいります。

元日の『朝日新聞』文化・文芸欄の「新春詠」に、歌人永田和宏さんの「不時着」と題する歌が掲載されました。

不時着と言ひ替へられて海さむし言葉の危機が時代の危機だ

いま私たちが感じている不安を見事に切り取った歌だと思います。都合のいい言葉で事実をすり替え、目の前の現実に真摯に向き合うことを忘れた時、私たちは言葉の正しさを失うことになります。私たちの会は、少なくともそのことに関しては臆病であり続けたいと思っています。

目次

卷頭言	言葉の危機が時代の危機だ	p1
報告	八王子の戦跡と浅川地下壕をめぐるバスツアーの感想	p2-3
報告	第11期ガイド養成講座始まる	p4
報告	小学生・中学生を案内しました	p4-5
講演	海軍元通信兵 近藤恭造さんのお話	p6-9
連載	日吉第一校舎ノート(11) アール・デコの意匠(1)	p10-11
連載	地下壕設備アレコレ(18)バッテリーと充電用整流器	p11-12
連載	海外の戦跡めぐり(5) パール・ハーバー(上)	p13
訃報	新井揆博さんが亡くなりました	p14
お知らせ	第11回公開講座《戦争の何を「引き継ぐ」のか》	p15
活動の記録	(12~1月) :	p16

報告

八王子の戦跡と浅川地下壕をめぐるバスツアーの感想

運営委員 小山信雄

11月27日(日)朝、参加者は慶應義塾大学日吉キャンパス守衛所前に集合し、8時過ぎに20名を載せたバスは黄金色に鈍く輝く銀杏並木を後にして、一路八王子の戦跡に向け出発した。「今回は何とか天気ももちそうだ」と一同安堵の中、最初の見学ポイントである「戦災樹木の銀杏並木」を訪ねた。終戦まじかの昭和20年8月2日未明、B29の170機に及ぶ大編隊は多摩地区の中心都市であり軍需工場もある八王子を空襲した。市街地の8割が焼失し450名以上の死者及び多数の負傷者を出した空襲の爪痕は、西八王子から高尾駅に続く甲州街道の銀杏並木に今もはっきりと残っていた。

次に、米軍が投下した250kg爆弾で出来た爆弾坑(クレーター)が10個以上並んでいるという丘(犬目神明神社裏山)を訪ねた。ややぬかるんだ急斜面を登って現場に辿り着き、直径12mほどのクレーターを確認出来た。爆弾が投下された日は1945年4月4日とのことで、奇しくも日吉に250kg爆弾が投下された日と同日であった。



犬目神明神社裏山に残る爆弾坑のひとつ

出す惨劇となった。戦後、「戦災死者供養塔」が現場近くの線路脇に、そして1992年には40名以上の方々のお名前が刻まれた「慰靈の碑」が建立された。その中にはひとりの慶應義塾大学予科生(18歳)の名前も刻まれていた。

昼食後、高尾駅から徒歩15分程にある「浅川地下壕」を見学。昭和19年11月から始まった東京への本格的空襲の最初の攻撃目標となった「中島飛行機武蔵製作所(武蔵野市)」の疎開先の一つであり、零戦など航空機のエンジン製造の地下工場として、同年8月から工事開始。3地区、総延長10kmに及ぶ壕の中で唯一入壕可能な「イ地区」を見学。計画では1,200台の工作機械を設置し、月産300台のエンジン生産予定であった。敗戦間際には330台の工作機械が据え付けられ、実際にエンジンが作られていたとのことだが、素掘りの壕内の空気は湿っぽく、岩石の多いゴツゴツした足場はかなり歩き辛く、水溜まりを避けながらの見学

甲州街道沿いの「戦災樹木の銀杏並木」の説明をされる
浅川地下壕保存の会の斎藤勉さん

続いて「湯ノ花トンネル空襲慰靈碑」を訪ねた。広島に「新型爆弾」が投下された前日の8月5日に、米戦闘機P51数機が飛来。3日前に空襲で不通となっていた中央線が漸く復旧し、運転が再開されたばかりの、長野方面に向かう8両編成の下り列車に襲い掛かった。日曜日でもあり大勢の非戦闘員乗客で満員だった列車が「湯ノ花トンネル」に差し掛かった頃に標的とされ、列車がトンネルに頭を入れた所で急停車した後も、繰り返し機銃掃射され、53名の死者、130名以上の負傷者を



写真中央のトンネルが「湯ノ花トンネル」
上部に高速道路（圏央道・中央道が走る）



中央線線路脇の「慰靈の碑」

となつた。「よくもこのような環境で精密機械の製造が出来たものだ」とつくづく感じた。この時期、ここまで追い詰められてもこうした努力がなされていたことに何とも遣り切れないと感じると同時に、この地下壕内の工作機械の大半が made in America ということにはとても複雑な思いがした。

JR高尾駅には「弾痕の残る柱」があるとのことで今回の最後のコースとして見学。1・2番線のホームにある二本の鉄製の柱（31と33）には機銃掃射の痕が生々しく残っており、弾痕の箇所の辺りは白ペンキが無くとても分かり易くなっていた。

今回は、浅川地下壕保存の会の齋藤勉さん、中田均さんに丁寧で分かり易い説明・案内をしていただき、八王子に残るさまざまな戦跡に対する理解を深めることができました。ありがとうございました。また、毎回のことながら、安全に私達を現地に運んでくれた岡上さんに感謝申し上げます。



浅川地下壕「イ地区」



JR高尾駅1・2番線ホームの
「機銃掃射の弾痕の残る柱」

報告

第11期ガイド養成講座始まる

運営委員 佐藤宗達



「聞く」今回は初めての試みとして当会のメンバーによる体験・親から聞いた話・見学体験を話してもらう事にしております。第三回は4月15日「フィールドワーク」。普段行けない場所も廻る事とし午前・午後で廻る予定にしています。第四回は5月20日「ガイド活動の実際・まとめ」を予定しております。受講者4名の方は地元のお住まい日吉台地下壕に興味のお持ちの方々なので共にガイドしていきましょう。

報告

小学生・中学生を案内しました

運営委員 佐藤宗達

毎年12月、1月に地元の小学生が見学に訪れます。昨年の12月16日には、日吉南小学校の六年生4クラス・先生148名が見学。これだけの人数となると地下の作戦室が人で埋まります。今年に入り1月18日、日吉台小学校の六年生3クラス・先生110名が見学。茂呂さんのレクチャーでは同校創立百周年記念誌に載ってる石川ハナ先生の思い出から空襲で校舎が全焼した様子を紹介しました。また民有地との境ではこの先の民家に爆弾が落ち4名がなくなった悲しい事実も伝えました。1月20日、藤沢市立高倉中学校の一年生5クラス・先生175名が見学。来年の広島修学旅行行事前学習という事で午前3クラス、午後2クラスを案内しました。同校の見学は日吉台地下壕と川崎市平和館を廻る事から、空襲地図は日吉だけでなく、中原の空襲被害地図を見てもらいました。また藤沢周辺には本土決戦用壕軍事施設があった事、連合軍は



2017.1.18 日吉台小学校6年生の見学会（地下作戦室）



2017.1.20 藤沢市立高倉中学校 1年生の見学会（来往舎）

茅ヶ崎海岸上陸作戦をたてていた事などを説明しましたら熱心に聞いてくれました。1月27日、矢上小学校の六年生3クラス・先生92名が見学。これからも毎年来てくれることを期待しております。なお学校単位ではありませんが1月25日の定例見学会に横浜市立鶴ヶ峰中学校2年生と先生10名が参加してくれました。見学会の最後の質疑応答時に生徒さんから質問があり、熱心に見学してくれました。



2017.1.27 矢上小学校の見学会（通信室）

講演

2016.3.12 ガイド養成講座第3回での講演要旨
 レイテ沖海戦で沈没した空母瑞鶴乗組みの
 海軍元通信兵 近藤恭造さんのお話

文責 山田譲

【この講演再録は2016年3月12日のガイド養成講座での近藤恭造さんのお話の要旨です。お話の順序を、読者の皆さんにわかりやすいよう多少入れかえています。ご了解ください。】

はじめに

昨年は戦後70年。戦争があったということを、私たち戦争で生き残った者の責務として後世に残していくことを、話を聞いていただくことは、亡くなられた方への、たいへん供養になる。みなさんに話を聞いてもらえることは本当にありがたい。二度とあの悲惨な過ちを犯してはならないと、真実を語り継ぐことを訴えてまいりました。

(この後、「最後の連合艦隊」「小沢囮艦隊」と題して、レイテ沖海戦の説明のお話がありましたが、ここでは略させていただきます。)

① 海軍通信学校に入校

昭和19年1月10日、私は15才で海軍防府通信学校(山口県)に入校し、1ヶ月で(神奈川県)久里浜通信学校に移動しました。防府では三田尻湾でカッター訓練や手旗訓練をしましたが、通信のツの字もない生活でした。体験した懲罰としては、連帶責任で1回だけ精神棒(バッター)で尻をなぐられました。海軍ではこの1回だけです。一番太い5号の棒で15cm位の太さ、野球のバット位です。細い方が食い込んで痛い。食事は陸軍と違って海軍は豊富でした。船には必ず食料をもっていますから。士官は銀シャリ(白米)で、下士官、兵は麦交じりの麦飯でした。

横須賀(久里浜)でも新兵教育ばかりでした。そこから50名だけ静岡の鈴川通信隊(今吉原)に行かされて、3月から10月まで7ヶ月特信班の教育を受けました。居る所は1棟だけで、隣に管理棟がありました。1階が寝たり食事をする所で、2階が教場でした。受信機が60台あり、横引き電鍵(モールス信号を打電する機械のひとつ)を使いました。アルファベットを1分間に120字聞き取る。耳と指の運動をさせられました。英会話の訓練も受けました。英語受信を「ボイス」と言っていました。英語しか使えない訓練もありました。耳の訓練は耳に手をあててパッと離す。繰り返すと頭がクラクラします。指は鉛筆削りを20本。小さい海軍ナイフを使い、指にタコができます。海軍体操で腕をふりながら、指を開いたり閉じたりを30分くりかえしました。

鈴川では50名でしたが、普通、1個分隊が50人。これに大尉が1人つきます。なごやかで家族的でした。朝礼は素足で砂場でした。体操が長い。1時間から1時間半もやる。教育を朝昼晩受けました。食卓当番もなしで、自発的にやっていました。みんな特年兵で、そのうち私たち10名が艦隊に行き、他の人は艦隊に行っていません。その10名のうち助かったのは2人だけで、今も生きているのは自分だけです。

② 海軍特年兵—特別年少兵

特年兵というのは、14才で募集する史上最年少の志願兵です。ただし通信、予科練、水測は除くとなっていましたが少年通信兵として募集していました。これに応募しました。

1942年9月1日に第1期特年兵は3,200人で、



「話を聞いていただくことは戦死者への供養」と語られる近藤恭造さん

海兵团に入りました。全4期で17,200人採用し、うち5,000名が戦死しました。海軍特年兵の碑が東郷神社の中に入ります。軍艦の中にも神社があります。空母瑞鶴には権原神宮の艦内神社がありました。

③ 空母瑞鶴に乗組み

鈴川通信隊を卒業した後、呉の鎮守府に行って、そこから大分の航空隊基地で艦隊来港まで3日間くらい待機しました。毎日基地を飛び立つのが50～60機で、5～6機は帰ってきませんでした。

10月19日に空母瑞鶴に乗組み、10月21日に上等兵に昇進しました。艦長も少将に進級しましたが、小沢中将が艦隊司令官としていたので艦長は自分の将旗（少将旗）を揚げられずじまいになってしまいました。自分は食卓当番をやりましたが、これを上等兵がやるのは異例だったのでみんなによくしてもらいました。タラップが急で、両手にぶらさげて下るのはたいへんでした。

瑞鶴は34ノットで63km／時の速さが出ます。甲板だと立っていられない風です。全力で航行すると燃料消費がすごいですね。

④ 空母瑞鶴での通信室の状況

通信室は3室ありました。特信班は国外通信（傍受）担当で、艦の一番下の室でした。味方通信担当の通信室は2室あり、上甲板近くと艦の下部でした。特信班は20名で、士官3名（予備学生の中尉1人、少尉2人）、下士官7人（上等兵曹2人、一等兵曹2人、二等兵曹3人）上等水兵10人。受信機は92式特改3、改4が15台ありましたが、実際に使ったのは10台です。送信機も1台位ありましたが使いませんでした。

瑞鶴が沈没するまえに、艦隊司令部は巡洋艦大淀に移りました。瑞鶴が沈没して私は、駆逐艦若月に助けられました。その前に他の駆逐艦に助けられた人は、その船がそのあと沈められてしまいました。たすかった私はこのあと、大和田通信隊勤務になりました。

このレイテ沖海戦で、はじめて神風特攻隊が発進しました。しかし、一機一艦と言いますがほとんど撃墜されました。米軍はVT信管（近接信管）を使っていて、飛行機に当たらなくとも、飛行機の近くに来ると爆発します。日本の時限信管と違います。日本海軍のレーダーも米軍より劣りました。

⑤ 特信班と大和田通信隊

特信班というのは正式名称は、海軍軍令部特務班です。本拠は（霞が関の）海軍省軍令部と大和田通信隊（埼玉県大宮市）です。また各艦隊司令部にネットワークがあります。特信班（大和田）は連合艦隊（日吉）とも連絡がありました。

大和田には、A. B. C. R. Oの班があり、A班はアメリカ、O班は暗号でした。しかし暗号はアメリカに負けていました。山本五十六連合艦隊司令長官は、暗号を解読されていてやられました。古賀峯一大将も事故死しました。大和田通信隊は、電波受信状況最良でアメリカにまっすぐ向いていました。

地上の通信所と半地下壕の通信所があり、半地下壕の方は壁厚1mで500kg爆弾に耐えられるが使っていませんでした。士官宿舎と上曹宿舎、下士官・兵宿舎があり、便所棟もありました。そこは水流式の水洗便所でした。普通は使ったらみんな自分で水を流すんですが、定期的に水が流れてくるんです。水流式と言っていました。これも非常にめずらしいですね。他に床屋もありました。ここは戦後は米軍が使い、そのあとも施設は使われました。

⑥ 戦後は米軍に勤めてから自衛隊勤務へ

9月1日に大和田から復員しました。C級戦犯になるのではないかとおどかされました。実際そういう人もいました。復員時に毛布2枚と30円位もらいました。もともと品川に住んでいましたが、大空襲でやられて何もありません。家の人は戸塚に疎開していましたが、間借りで狭く、1週間ほどいて横浜に行きました。

米軍第8軍が進駐していて、第3種軍装（海軍陸戦隊の軍服でカーキ色）で「仕事はないか」と言ったら、「クレージー」と言われましたが下士官から士官に話をもっていってくれて、

「鶴見の化学部隊に行け」と言われました。生麦の大黒町にある第10化学部隊です。そこでも「クレージー」と言われましたが、キャプテン（陸軍では大尉）が来て「通信をやっていた」というと、「使ってやる。まず炊事をやれ」と言うので、「菓子屋の息子だ」と言うと「ベーカーをやれ」と言われました。それで伊勢佐木町のセスナの飛行場がある所に行かされて、健康診断を受けて結果がすぐにでて、化学部隊に戻りました。「パイを焼け」と言われて、うまくできたので採用されました。住む所がないので宿舎に入れてもらいました。「いらっしゃい」と言うので、「多いほどいい」と言うと1日20円くれました。パイやケーキをつくりました。その後、朝鮮戦争が始まり部隊は半分行ってしまいました。

それで警察予備隊ができたので、すぐに入りました。まず警察学校に1週間行きました。越中島に本部ができたのでそこに行き、その後六本木。今は市ヶ谷です。定年年齢は階級によってちがって、自分は50才で定年。若年恩給も出ます。その後就職斡旋で横浜国大に公務員試験なしで、国家公務員技官の扱いで採用されました。海軍技術大尉だった人が面接官で、ちょうど10月25日だったので、瑞鶴の話をしたらウマが合いました。初めの3ヶ月はその先生の授業を受けて、（昭和54年）1月1日付で5等級（課長クラス）で採用され、10年間勤めて昭和64年に60才で定年。その後証券会社に3年いました。バブルがはじけて嘱託社員はみんな退職となり、日本橋でプラプラしていて、その後日本ビルメンテナンスで平成26年6月まで働きました。今日いっしょに来た山本さんはそこの人です。

〈質疑応答〉

質問① 空母瑞鶴の沈没時の状況をお聞かせください

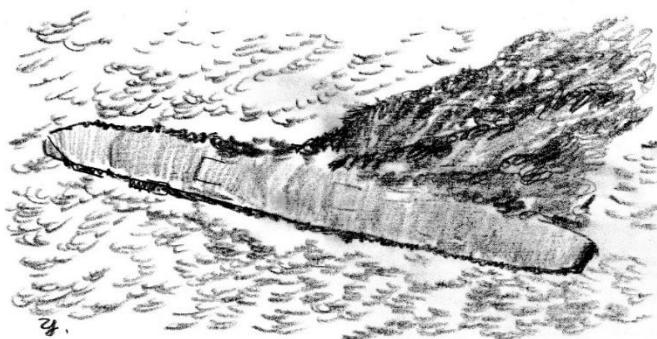
瑞鶴に10名の新兵が乗ったのも不思議でしたが、自分は運がよかったです。上出（かみいで）兵曹が隣の机で「何かあつたら俺についてこい」と言ってくれました。「着たものをぬがないで泳げ」と言されました。着たまま泳ぐのはたいへんです。30度に傾いた時、退艦命令が出て上出兵曹が「俺についてこい」と言いました。しかし真っ暗で船の下部の部屋です。ハッチは閉められています。避難用の通路が一ヶ所（大きい艦だと2～3ヶ所）あけてあります。ビル4階建てと同じ高さで、タラップを6つ上がらないと上甲板（飛行甲板）に出られません。上出兵曹の声をたよりについていきました。上に出て、上甲板のヘリにまたがっていました。「全員飛び込め」と命令があり、すべり台からすべり降りるように飛び込みました。「ともかく200m.泳げ」「靴だけは脱げ」と言されました。3種軍装（事業服ではない）を着ていました。死に物狂いで泳ぎました。のどはカラカラでしたが、でも海水は飲めません。しかし、かたまっていると米軍のグラマン機に撃たれるので散らばっていました。瑞鶴は最後は直立して沈没しました。すごい渦でズーンとすごい音がして爆発音がしました。すごい震動で心臓が爆発するような音でした。瑞鶴が沈んではじめて、大きい漂流物があつたのでつかまりました。材木がどんどん浮いてきて、上出兵曹がそばにいて、「大きい材木につかまれ」と言されました。一寸角の材木です。F6F（グラマン機）が上空を哨戒していました。軍歌を歌う者もいましたがそんな気力もなく、「助けてくれるかなあ」という心境でした。

駆逐艦が來たので、モノをかかえて泳いでいきましたが行ってしまいました。しかしその後、その駆逐艦はやられてしまいました。ともかく生きようという気持ちでいたら、駆逐艦若月が来てくれました。頭にネズミがのっていて、「ジョンベラ（兵長以下の水兵のこと）、ネズミを入れる気か」と言われてふりはらって落としました。若月も被弾していて居住区も20cm位浸水していました。上出兵曹が「上に行こう」と言って煙突で暖まりました。ニギリメシとタクワンを出してくれました。艦としては人が乗りすぎると燃費が悪く、なるべくおろしたい。それで艦隊司令部要員（通信兵もその一部）は、26日宮古島で巡洋艦大淀に移乗しました。27日には奄美大島で航空戦艦伊勢に移乗し、呉に帰港しました。その後、特信班は空母雲龍に乗れというので呉で乗艦し3日間いましたが、大和田の本隊に行けというのでおりました。この雲龍は2ヶ月後に潜水艦にやられました。

質問② 米軍の通信・放送はどのようなものでしたか

平文も暗号文もアルファベットで送られてきます。数字の暗号文ではありません。音声通話でアルファベットを言っているものもありました。音声通信は「ボイス」と言っていました。

少尉が常に2人いて1人は伝令で、艦橋まで上がって行くのでたいへんでした。ホノルル放送とかというのは、軍の通信でなく一般放送です。戦果の発表もあるので聞いていました。受信台によって周波数帯が決まっていて、その範囲をダイヤルを回してずっと通信をさがしていました。通信室内には送信機もありました。受信機と発信周波数がちがうので問題ありません。



黒煙を上げながら航行する空母「瑞鶴」。爆弾4発、魚雷7本を受けて沈没。乗員1,700名の内、生存者は半数の866名

質問③ 受信音はどのような感じでしたか

受信するモールス符号は音量に波があって聞き取りづらいです。音量が上下する中で、長音か短音かを聞き分けないといけません。

質問④ 志願した時の気持はどのようなものでしたか

学校の生徒が予科練にいくようになり、自分も、と思いました。お国のためにと思って志願しました。戦争は勝つと思っていました。大和田に行った時もまだ勝つと思っていました。原爆のことを聞いて、これはダメだと思いました。

近藤恭造さんの経歴・軍歴

昭和4年1月10日生 品川区荏原

昭和19年1月 神田電機学校本科4期(弱電)・海軍入隊のため中退

1月 防府通信学校入校

2月 久里浜通信学校入校

3月 鈴川通信隊(静岡県)入隊・特信班 教育・訓練受講

10月 第70期普通科練習生特信課程卒業

第一機動艦隊司令部・空母瑞鶴 配属 上等兵に昇任

11月 大和田通信隊配属

昭和20年3月 水兵長に昇任

9月 復員 二等兵曹に昇任

10月 米軍第8軍化学部隊勤務

昭和25年9月 警察予備隊(後に陸上自衛隊)勤務

昭和54年1月 自衛隊定年(50才)退官 横浜国立大学勤務

昭和64年1月 横浜国立大学定年退官 証券会社入社

平成4年4月 証券会社退職 日本ビルメンテナンス入社

平成26年6月 日本ビルメンテナンス退職

現在 神奈川県逗子市在住

近藤恭造さんから、補足説明をいただきました。

「◎特年兵について——『少年通信兵』募集のチラシでした。当局では、14歳からの募集であるので、『幼年』を考えたそうですが、陸軍から、『幼年学校』があるので大反対をされ特年兵としました。ただし、通信・電測・予科練は、『準特年兵』です。違いは、特年兵は、海兵団に入隊、通信等は、各専門の学校へ入校。」とのことです。

連載

日吉第一校舎ノート(11) アール・デコの意匠(その1)

会長 阿久沢 武史

第一校舎は古代ギリシアに通じる自由な精神と哲学的な知性を象徴するモニュメントとして、竣工以来80年以上経った今も、若者の学びの場として変わらぬ価値を伝えている。その根底には、「理想的新学園建設」の構想を最初に打ち出した塾長林陸毅のグランドデザインがあり、それを引き継いだ新塾長小泉信三の日吉開設に向けた情熱、初代日吉主任となった教育学者小林澄兄のヨーロッパを範とする新教育運動の理想があった。その上で、近代日本を代表する建築家・中條精一郎が百年先の未来を夢みながらキャンパス全体の基本計画を立案し、28歳の若き建築家・網戸武夫がその最初の学び舎をデザインした。鉄筋コンクリートの打放しに白色セメントスプレーを吹き付けた白亜の校舎は、遠く西洋の古代に源流を持つギリシア風のコロネード(列柱廊)と相俟って、きわめて古典的な風貌を持つとともに、四角い箱型のモダニズム建築の印象をも見る者に与えている。

師である中村順平から徹底した古典主義教育を受けながらも、網戸は単純な様式主義を脱し、世界基準の新しい建築の手法を取り入れた。こうした古典主義とモダニズムの融合こそが、この校舎の最も大きな特徴だと言つてよい。

加えて、第一校舎の最大の特徴のひとつにアール・デコの意匠があげられる。網戸はヨーロッパを中心に当時世界で流行していたアール・デコの装飾を取り入れることで、建築にモダンな印象と深みを与えた。その典型的な箇所は二つある。一つは正面玄関を中心とする西側中央のファザードであり(写真①)、もう一つは正面玄関に向かって左端の壁面にあるレリーフ(写真②)である。

周知のように、アール・デコは1920~30年代の建築・工芸・グラフィック・ファッショングなどに見られるモダンな装飾デザインの総称であり、1925年にパリで開かれた万博(いわゆる「アール・デコ博」)を機に世界に広がった。その特徴は、一般に直線的・無機的・幾何学的・対称的・立体的と言われる。いわば定規とコンパスで描きうるシンプルなデザインであり、世紀末に流行したアール・ヌーヴォーの曲線的・有機的・非幾何学的・非対称的・平面的なデザインとは対照的なものである(吉田鋼市『アール・デコの建築』中公新書)。この時期の日本の建築家や芸術家、デザイナーたちは、この最先端の流行を進んで取り入れた。世界の最新のモード(流行)がほぼ同時進行的に日本に入るようになった時代である。大正以降のモダニズム文化と大衆消費社会の進展の中で、アール・デコのデザインはポスター・挿絵・インテリア・室内装飾・貴金属・陶磁器など至るところに広がりを見せる。建築の分野での代表は、朝香宮邸(現・東京都庭園美術館)である。朝香宮はフランス滞在中にアール・デコ博を見学しており、昭和8年(1933)建築のこの洋館は、まさにパリ直輸入のアール・デコが溢れる空間となっている。

世界が「網の目」のようにながったこの時期はまた、豪華客船が次々に建造された時代でもあった。大型の客船が世界の各都市を航路で結び、一等室のキャビンや食堂、紳士淑女



写真① 第一校舎正面玄関(竣工当時)、1934年5月、慶應義塾福澤研究センター所蔵

が集う社交空間は、モダンでシックなアール・デコの内装や家具・照明で飾られた。例えば我々は横浜港に係留保存されている昭和5年（1930）竣工の氷川丸の船内に入ることで、この時代の空気を感じることができる。氷川丸の船内設計はフランス人デザイナーによるものであるが、この時期に日本で造られた豪華客船の多くには、日本人の第一線の建築家も関わっていた。その中の一人に中村順平がいた。



写真② 校舎左端二階部分のアール・デコのレリーフ（竣工年が西暦と皇紀で併記されている）

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号（2015年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。

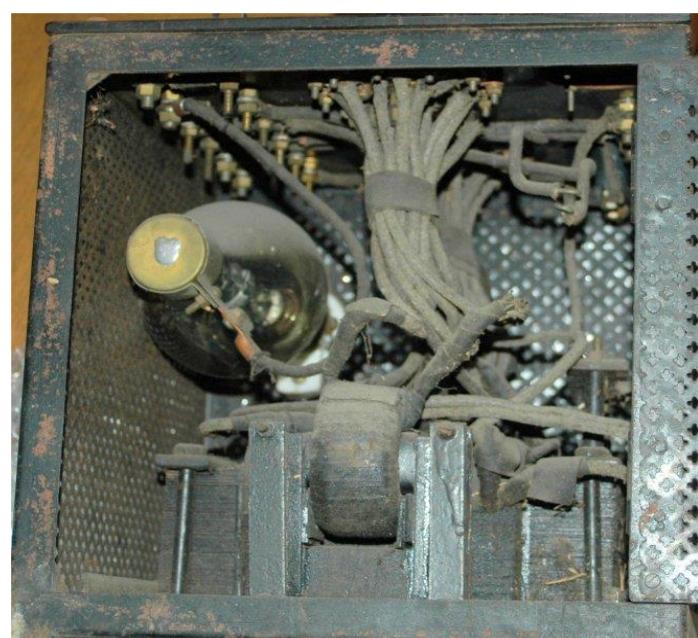
連載

地下壕設備アレコレ【18】 バッテリーと充電用整流器

運営委員 山田譲

前回、紹介した佐世保海軍通信隊満場分遣隊の「引渡目録」の中に出てくる「タンガ一式充電器」のことを調べてみたら、おもしろいことがわかりました。インターネットで検索してみると「日本ラジオ博物館」のウェブサイトが出てきて、真空管式受信機に不可欠なバッテリーとその充電用整流器のことが写真入りでくわしく解説していました。

私はそれまで、当時のバッテリー（鉛蓄電池）がどのような容器に入っていたのか、わからませんでした。鉛板と硫酸でできている鉛蓄電池は、現在、自動車などで使われているものは全てプラスチックの容器に入っています。硫酸を入れるので耐酸性でないといけません。しかしプラスチックは戦後のものです。ガラスケースだったのだろうか？ あるいは琺瑯（ほうろう）製かなあと思っていたわけです。その答はエボナイトとガラスでした。1895年に日本で初めてつくられた日本電池（株）製のラジオ用鉛蓄電池がエボナイト容器でした。エボナイトは生ゴムに多量の硫黄を加えてつくられる硬化ゴムです。戦前からよく使われてきた樹脂材料です。その後、自動車用バッテリーはエボナイトケースのままで、ラジオ用はガラス瓶に入ったものをいくつかまとめて木製ケースに入れたものに、切り替わっていったそうです。



タンガ一式整流充電器の内部
タンガーバルブが見える

1935年頃から戦時中にかけてつくられた湯浅蓄電池製造株の「ラジオ用A蓄電池」は、ハンドルのついた木製ケース入りで、この中にガラスケースのセルが3個入れてあり、各セルの電圧は2ボルトで合計6ボルトの電圧が発生します。大きさは写真で見ると、縦20cm位、横15cm位、奥行きは15~20cmです。銘板には「陸軍省海軍省通信省鉄道省 指定工場」と記されています。陸海軍の通信所はもちろん、全ての軍港、航空基地、艦船、航空機にバッテリーは不可欠でした。これにも見てとれるように、電気通信企業も軍需産業のひとつとして大きな位置を占め、軍需景気の恩恵を受けつつ戦争遂行の一翼を担っていたわけです。

それはともかく、真空管式受信機を動かすためには、一般的にはフィラメント用のA電池6ボルトとプレート用のB電池22.5ボルトが必要だったようです。このB電池のためには2ボルトのセルを12個ならべたものを作ればいいわけです。日吉でも使われていた九二式特受信機改四の電源は、「低圧フィラメント用蓄電池6ボルト、高圧プレート用蓄電池100ボルト2個」となっています。他にバイアス用のC電池を使うこともあったようです。(今では真空管は博物館行きなのに、昔の専門用語で話がわかりにくくてすみません。)

これらの電源は全て直流でないといけません。そしてバッテリーから電気を出し入れするのも当然直流です。それで次に登場するのが、バッテリー充電用の直流電気をつくるための整流器です。日吉の場合は元の電源は、電力会社から来ている100ボルト交流電気か、ジーゼル発電機による交流電源ですから、交流を直流にかえる整流器は不可欠です。整流器にはいろいろなタイプがあるのですが、満場分遣隊のタンガー式充電器はそのひとつです。

「日本ラジオ博物館」のウェブサイトによると「抵抗タンガー式充電器」というのは、「二極管」で「タンガーバルブ」という特殊な真空管であり、「電球の側面にプレート電極を設けた形状でガス入り」だそうです。連載第12回で「水銀整流器」について書きましたが、これと整流の原理は同じですが、形はだいぶ違うようです。『無線工学ハンドブック』(オーム社、昭和39年刊)によると、このタンガーバルブは熱陰極放電管とも呼ばれていて、少量のアルゴンガス、または水銀蒸気、あるいはこの二つの混合ガスを封入してあたそうです。昔のラジオには、このタイプの整流器がついていたこともあったようですが、私は今まで見たことも聞いたこともありませんでした。



湯浅蓄電池製造株製 A 蓄電池 RA-2 型

写真提供：日本ラジオ博物館
所在地は、長野県松本市中央 2-4-9



連載

海外の戦跡めぐり(5) トロトロトロ、パール・ハーバー(上)

運営委員 佐藤宗達

パール・ハーバーにはアリゾナ記念館、戦艦ミズーリ記念館、潜水艦ボウフィン号、太平洋航空博物館の4ヶ所の見学ポイントがあります。日本人ガイド付き半日ツアーに参加すると手際良く廻れます。「アリゾナ記念館」はパールハーバー・ビジターセンターにあります。入場に際して手荷物持ち込みが制限されておりカメラ、財布ぐらいしか持ち込めませんので要注意。まず資料館が2棟あります。「戦争への道資料館」では太平洋戦争に至るまでの経緯を写真等の展示解説があり、アリゾナの模型もあります。なお館の入口には

”Conflict is brewing in Asia. The old world order is changing. Two new powers, The United States and Japan are rising to take leading roles on the world stage. Both seek to further their own national interests, Both hope to avoid war, Both have embarked on courses of action that will collide at Pearl Harbor”

と書かれています。石碑ではなくアクリル板なので見過ごしてしまいますが正当な説明だと思います。隣は「攻撃時資料館」です。12月7日の攻撃時の写真が多数あります。真珠湾を目指したものの、目的を果たせなかつた特殊潜航艇（甲標的）の写真もありますが “BUY MORE” と戦時国債販売のキャンペーンに全米を廻つたと説明がありました。「真珠湾メモリアルシアター」で当時の記録映画が上映されます。入場券購入時に上映時間が指定されます。日本側が撮ったフィルムも交じり圧倒されます。米国では戦没者は

尊敬されており説明の端々に悼む文言が聞かれます。「アリゾナ記念館」にはシャトルボートで移動します。沈んだ戦艦の中心部を跨ぐように設置されており、下を覗くと船体が見えますし油が流出しているのも見られます。ここでも戦没者を悼む説明板が並んでいます。

「潜水艦ボウフィン号」は同じ敷地内にあり、係留されており内部に入れます。日本の船を44隻沈めていますがそのうちの1隻が学童疎開船「対馬丸」なのです。聞いていて絶句です。米国人ガイドならその戦歴を讃え、対馬丸には言及しないでしょう。野外展示場には、何故か回天があります。操縦席が見えるようになっておりその狭さに改めて驚ろかされます。

また核弾頭搭載可能魚雷も展示されておりまさに「ギョッ」です。



戦時国債販売キャンペーンで全米を廻った
日本帝国海軍特殊潜航艇「甲標的」



アリゾナ記念館の「戦争の道資料館」入り口にある説明板



1944.8.22 沖縄からの学童疎開船「対馬丸」を
含む日本の船舶44隻を沈めた
米潜水艦ボウフィン号

訃報

副会長 亀岡敦子

当会副会長新井揆博さんが1月、84歳で亡くなられました。法政第二高等学校で教鞭をとり、退職後は地域の戦争遺跡（蟹ヶ谷通信隊地下壕・日吉台地下壕）の「研究と継承」と、市民歴史講座に情熱をかたむけ、日吉台地下壕見学案内の原型をつくり、会の知識を深めたかたで、誠に偉大な存在でした。また、戦争遺跡保存全国ネットワークの運営委員としても全国的に活躍され、最後まで戦跡保存が生活の中心でした。白井厚慶應義塾大学名誉教授は新井さんの訃報に、次のような哀悼の言葉をよせられました。

「予想されたとは言え、残念なことです。新井さんの活動は、教師のセカンドライフとしては最高の生き方だといつも尊敬の念をもって見ておりました。ご本人にとってはまだまだやるべき計画はたくさんあったでしょうに・・・」

心より感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

日吉台地下壕保存の会の皆様

大西 章

新年早々に辛いことが起きたことに悲しみがなくなりません。

地下壕保存の会の実質的なリーダーであり、この会の性格をつくられた方でした。説明するときに必ず一緒に勉強しましょうとか、質問は最後まで嫌がらず聞き、的確に丁寧に答えをするなど、けして上から目線のしゃべり方はせず、聞く方が穏やかになるようおしゃべりするのは本当に参考になりました。なかなか出来ない芸当でした。

そして、知識が豊富で、勉強意欲が高く、いつでも知識欲が高い人でした。この穏やかな人間性、豊富な知識を持って逝かれたことは本当に残念でたまりません。辛いです。

また、昨年の長谷川さん、そして新井さんと保存の会の酒豪の横綱お二人を失ったことも残念です。日本酒が前にあればニコニコしているお顔を忘れることができません。

合掌



平和のための戦争展で毎年展示している
絵画「市民が描いた戦争の記憶」に
新井さんが描かれた空襲体験



蟹ヶ谷通信隊の鐵塔跡地近辺の説明をされる新井揆博さん
(2015.11.8 戦跡バスツアーア)

第11回日吉台地下壕保存の会 公開講座

『戦争の何を「引き継ぐ」のか』 —慶應義塾における実名と実物の継承の試み—

日時：2017年4月8日(土) 午後1時～3時

講師：都倉武之氏 慶應義塾福澤研究センター准教授

演題：『戦争の何を「引き継ぐ」のか』

—慶應義塾における実名と実物の継承の試み—

会場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

主催：日吉台地下壕保存の会

☆参加費無料 事前予約不要 どなたでも参加できます

※この講座は「港北区地域のチカラ応援事業」の補助を受けています。

※問い合わせ先：亀岡 (Tel 045-561-2758)

慶應義塾では、2013年より「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを発足し、資料収集と調査研究、当事者への聞き取りなどを行い、戦争の時代と向きあっています。その研究の中心となっている都倉氏を講師に迎え、戦時下の慶應義塾と学生についてお話をさせていただきます。

講師プロフィール

1979年生れ 福澤研究センター准教授（慶應義塾大学法学部卒業 同大学院博士課程修了） 専門領域は近代日本政治史・近代日本政治思想史・近代日本メディア史

2013年より発足した「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの中心として調査研究に取り組むだけではなく、展示や講演を積極的に行っている。



第9期、10期
ガイド養成講
座修了ガイド
も活躍中！

活動の記録 2016年12月～2017年1月

12/13(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 12/14(水) 定例見学会 41名
 12/16(金) 地下壕見学会 横浜市立日吉南小学校
 　　6年生・先生 148名
 12/17(土) 定例見学会 58名

1/07(土) ガイド学習会(菊名フラット)
 1/11(水) 定例見学会 52名
 1/14(土) 第11期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 第1回
 　　(来往舎中会議室)
 1/17(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 1/18(水) 地下壕見学会 横浜市立日吉台小学校
 　　6年生・先生 110名
 1/20(金) 地下壕見学会 藤沢市立高倉中学校
 　　1年生・先生 175名(午前午後)
 1/27(金) 地下壕見学会 横浜市立矢上小学校
 　　6年生・先生 92名
 1/28(土) 定例見学会 33名
 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会新年会(武蔵小杉 中華一番)



晩秋の日吉キャンパス
銀杏並木



1月18日、日吉台小学校6年生の見学会
(来往舎でのオリエンテーション)

★定例見学会について日吉台地下壕の定例見学会は毎月2回実施しています。毎月第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13～15時30分

★地下壕見学会は予約申し込みが必要です。お問い合わせは見学会窓口まで
Tel・Fax 045-562-0443
(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報	(年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会	郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 阿久沢 武史	(加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会	